茅の輪（扶余系殷民達の風習か）

■「茅の輪」は、六月三〇日の「夏越の祓」において、病気を祓うために用いる輪のことである。

■神社の鳥居（もしくは、枝葉付きの二本の竹を垂直に立て、背丈ほどの高さのところに竹竿を水平に渡した鳥居様のもの）の開口部に、竹を軸に茅を巻いた大きな輪「茅の輪」を取付け、人々がこれをくぐり抜ける。

■この「茅の輪」をくぐり越すことによって所謂①

■奈良県桜井市三輪の大神神社では「御祓祭」と称しており、一の鳥居の外（西南）に鎮座する細越神社の祭である。（第334図下端参照）（下部神道ともいう）

■中世に（京都の）吉田神道が唱え事を定めて作法を複雑にし、宮中や伊勢神宮でもこの祭を行なったことがある。――しかし、もともと出雲系の神社の行事らしいといわれ、ことに祇園の社でひろく行なわれてきた。（写真図版443・444・445）「世界大百科事典」平凡社■「茅の輪」「大神神社」（中山和敬・学生社）二三～五頁参照

■尚、京都の祇園社（八坂神社の旧称）の祭神は、素戔嗚命、稲田比売命、八柱御子神である。（「日本社寺大観」名著刊行会「八坂神社」参照）

竹を撓めて軸とし、これに茅を巻いた大きな輪

2,650p - 2/7

限度一杯左右上

・カラー
・右頁上半分に、はみ出して大きく掲載下さい。

「大鼓です。」
記載不要。

14QG 写真図版443 大神神社の摂社綱越神社で執り行なわれる『御祓祭』

13QG
『大神神社』三好和義・岡野弘彦 淡交社 平成16年2月13日発行 124頁参照

12QG
・鳥居に取り付けられた茅の輪をくぐり、人形を受け、肩や胸など身体を撫で、息を三度吹きかけ、お祓いして、無病息災を祈る。
・茅の輪は、本来、円い『輪』状だったのだろう。つまずかないよう、輪の下半分が凵字状に変更されたのではなかろうか。411p

「大神神社」

上にはみ出て

・カラー

・左頁上 3/3 大きく載せて下さい。

次頁

2,650P - 3/7

カット

カット

412

142G 写真図版444 京都市八坂神社の『夏越祭』

13QG

『朝日新聞』平成15年7月31日付〈祇園祭に幕 夏越祭〉参照。

12QG 祇園祭の参加者や市民が茅の輪をくぐり無病息災を祈った。

「大神神社」中山和敬 225頁に貼布

2.650P－4/7

・白黒
・左頁下方
載せて下さい。
1/3

13QG　14QG

写真図版445　東京都荒川区素盞嗚神社の『茅の輪くぐり』

『牛頭天王と蘇民将来伝説』川村湊　(株)作品社　2008年3月15日第6刷発行　369頁参照

12QG・竹で鳥居状のものを作り『茅の輪』を取り付けている。

第334図の右下「初瀬川」（三輪川）

■大神神社の摂社である「綱越神社」は、御祓神社とも、夏越ノ社とも呼ばれ――旧六月晦日の大祓□御祓祭□（すなわち夏越祓）が厳粛に行われてきた古社として、広く世に知られている。

●現今は、七月三十日に宵宮祭、三十一日に例祭（トル）□御祓祭□が執り行なわれる。

●大神郷中の（トル）氏子はもちろん（トル）遠近から人々が人形を持って参り、□茅ノ輪くぐり□をして祓をうける。

●茅の輪を三回くぐるこの慣習は昔からさかんで、二日間とも大変な賑わいである。

●なお、茅の輪をくぐってきた人形は、その後、三輪大神から三輪川へ流しやられる、という。

「大神神社」中山和敬、学生社、二二三～五頁。

「大神神社」三好和義□岡野弘彦、淡交社、平成十六年二月十三日発行、一二四頁参照。

＊

■では、□茅の輪□は、一体何を示しているのだろうか。

2,650ページ-6/7

茅纏の矛 紀上112ページ 巻2379ページ-1/2

見立てる 元2119ページ 巻2648ページ-1/2

輪郭 元2331ページ 巻2795ページ 天神 アハ路島 国生み番号は○で示す

大神神社 225ページ 1行 巻2650ページ-2/7に説明有る。

HV

■なるほど、いうまでもなく定かでないものの、

往古の人々は、

①神社の祭神が男・女どちらであろうとも全く区別することなく、――その神社の神域を、女性の腹部

②鳥居を、女陰

③茅の輪を、陽物（つまり茅を纏った矛）の外皮の輪郭

（茅纏の矛）

大カネ 1755

に見立てたのであろう、と考えてみることにたい。（第三十七章〈天鈿女命〉の項↓

■『茅纏の矛』参照）

すなわち、三輪山の綱越神社をはじめとする出雲系の神社では、〈鳥居に、男根を象徴する『茅の輪』を取りつけて、これをくぐり抜け、――子孫繁栄を祈願したのであろう〉と想察される。

また、〈茅の輪をくぐって綱越神社へやって来た人形は、その後三輪川へ流され――――

コクヨ ケ-20 20×20

八土記489字
百科事典20-151字

「須佐之男命」（牛頭天王・武塔天神）と、「蘇民将来の子孫」

■「備後国風土記逸文」に、概略、次のような説話が記されている。

「須佐之男命（牛頭天王とも、武塔天神とも）は、宿を貸した蘇民将来の娘に、「茅の輪」を腰の上に着けさせておき、――！その女子一人以外を、皆悉に殺し亡ぼしてしまった。

後の世に疫病が流行したら、「蘇民将来の子孫である」といい、「茅の輪」を腰の上に着けよ。そのようにしたならば、厄災を免れるだろう」と言ったし、という。

■察するところ、ここにいう「腰」とは、陰部のことなの

㊎2652字2/6 6行

次頁から

2.651P－1/18

だろう
前頁 15行

であろう

と思われる。

コクヨ　ケ－20　20×20

前頁へ

新や(1)—95ページ下末45行目、
(中)932ページの6行へ

タイトル
(中)930ページ 11行目のてあるう 前頁

数
(中)265ページ—6/18

2,651ページ—3/18

先述のとおり

＊因みに述べると、神功皇后摂政前紀に、

「時に、適、皇后の開胎に当れり。皇后、則ち石を取りて腰に挿みて、云々」

とある。

＊〈神功皇后は、高塚の腰（陰部）に石をさしはさまれた〉

と推察される。〈第十二章〈「狗邪韓国」奪

回〉の項において既述〉

全く確証は無いが

「日四日本国〈中国・近畿地方〉に居住して

いた扶余系般民の子孫が、素戔嗚尊の

ことを「牛頭天王」とも「武塔天神」とも呼

んで敬っていた」

のではなかろうか。

＊

コクヨ ケ—20 20×20

避 大系2250 呉漢 ビヒ
邪 大系2255 呉漢 ジャ
即 大系306 ソク
生 大系1503 シャウ

家門 家門 家門 家門

奈文 邪 邪 避邪 心かかれ 辟難

二,651 - 3/18

牛頭 184 16行 先前

牛頭天王と蘇民将来 184
二見町 平八社 81 左上

改行

伊勢地方に牛頭天王・蘇民将来の伝説地が多く分布している。

[1] 「伊勢神宮のお膝元である二見浦に、蘇民将来（いわゆる牛頭天王信仰）の痕跡である「蘇民の森」がある。また、二見町内の家々には「蘇民将来之子孫也」と書いた注連縄飾りをお正月毎に玄関前に飾る風習が見られる。

この慣わしは、蘇民将来信仰が、極めて根強く、二見の住民たちの間で（現在も）生きていることを物語っている。

注連飾りは、藁を編んだ注連縄に、橙・裏白・柊・紙垂の飾りを取り付け、中央に木札を挿で結び付ける。（写真図版 446 参照）

木札は「桃符」と呼ばれ、桃や柳の板を使用していたが、今は専ら杉板を用いる。

桃・柳には、「避邪の意味がある。杉板は、その代用品。「人類は古くから、ヤギの樹皮に解熱鎮痛効果が

札の表には「七福即生・蘇民将来子孫家門」

七難即滅」と書き、裏には「急急如律令」（急

125 QM

次頁

あることに気付いていた人もいる。
十八日付18面〈アスピリン〉参照 (例1/4 - 3/3 対象)
「朝日新聞」令和四年八月

165

コクヨ ケ-20 20×20

2.651ｐ-4/18

・カラー
・頁の上半分と載せてください。

14QG 写真図版446 伊勢の注連縄飾り

13QG

『日本全国神話・伝説の旅』吉元昭治↖勉誠出版↖2009年1月20日発行↖131頁参照。

急に律令の如く厳しくせよの意で「悪魔を退散させる呪文の一つ」◎八衢比売命・久那戸神ロ「岐神」「集落の入口などの分岐点にまつり、災禍の侵入を防ぐ神」などと書く。

一般的には、新しい注連飾りをお正月直前に取り付け、正月が過ぎるとドンド焼きなどと称して燃やしてしまう。

しかし、伊勢地方では、一年中門前に飾っておく。もともと、注連飾りとしてより「蘇民将来のお守りとしての意味を持っていたからだろう。

〈牛頭天王信仰・蘇民将来信仰が「極めて早い時期」伊勢神宮建立以前」に「この伊勢の地域へ入り「人々によって信じられていた〉

ということは明らかである。」

という。（「牛頭天王と蘇民将来伝説」川村湊「(株)作品社」二〇〇八年三月一五日第六刷発行「一八四～五頁参照」）

「牛頭天王」185P〜 新や(1)−156頁 二見町・松下 平成8年号 (OK)

2.651P−6/18

多分 (社)2657P−15 8行

天つき改行

アキ

・つまり、

(1) 牛頭天王信仰・蘇民将来信仰が、非常に早い時期から、伊勢の地の住民に信じられていた。

(2) その後、伊勢神宮が建立された。

という経緯があったのだろう。というと。

・なるほど、そのような感が強い。

※恐らく、

(イ) 日本列島へ渡来した扶余系殷民の子孫達が、牛頭天王信仰・蘇民将来信仰を大切にしていた。

(ロ) 後年、素戔嗚命(大己貴命の領域内に住む扶余系殷民の子孫達は、牛頭天王と素戔嗚命とを同一視するようになった。

(ハ) 八咫鏡は、↑↑↑欽明三十六年(五六五)ころ南伊勢の山中に安置され、文武二年(六九八)十二月に度会郡(の平野部)へ移された。(外宮)

(ハ) 皇大神宮(内宮)は、その後の七一〇年ころ現在地へ↑↑↑遷された。

と思われる。(第9表参照)

(第7巻425P 3行)

(二見町の南)

平成2年250ページ

図 伊勢の松下地区には、牛頭天王儀軌という文書が伝わっている。

(新や(1)−156 右段)

コクヨ ケ−20 20×20 儀礼等の規則 経典

(第7巻)422

大和「民話」伝承された説話

2,651字 7/18

こと

瀬古 平凡社にも、他の地図にも無い

「牛頭天王が宿を借りようとした際、長者の巨旦は断り、貧者の蘇民将来が温かく牛頭天王をもてなしてくれた。云々」

と語られている。

③ 伊勢の瀬古地区にも、類似した民話が語り継がれている。

「スサノヲノミコトは、瀬古の地一番の長者であった巨旦の家で泊めてもらえず、貧しい蘇民将来の家で宿を得ることが出来た。

ある年、再び伊勢に来たところ、蘇民将来の妻はなく、娘一人がいるだけだった。

スサノヲは、巨旦を滅ぼした。そして娘に今後疫病が流行った時には、「蘇民将来の子孫」だといって、茅の輪を腰に付けなさいと教えた。

以来、瀬古の地では、家々の門口に「蘇民将来子孫繁盛の家」という木の札を掲げるようになった」

という伝承である。

④ 「もちろん、口承の説話（民話）や神話の細

得る　借りる

印象 田2652ア-4/6 12行
郭や(1)

2,651ア-8/18

部がいろいろ変化するのは「当たり前だ」。

しかしそれにしても「日本の神道の聖地である伊勢神宮の近隣に『記紀神話と全く関連性の無い』牛頭天王信仰■蘇民将来信仰」が脈々と伝わっているのは「驚くべきことであり」また不思議でもあるL

という。（「牛頭天王と蘇民将来伝説」川村湊『(株)作品社』二〇〇八年三月一五日第六刷発行『一八五～九頁参照』）

■伊勢地方のこれらの説話から推し測ると「素戔嗚命（大己貴命）の所領範囲は「伊勢地方にまでもおよんでいたL

ような印象を受ける。（要検討）

■また「日辺日本国を併合した倭人達は「扶余系殷民達の祭りを咎め立てしたりせず「……牛頭天王信仰■蘇民将来信仰」等の祭祀を継続させてやったように見受けられる。

前頁7行，12行

2,651字－9/18

1字アキ

なお、

(イ) 内宮・外宮・外宮で奉仕していたのは扶余系殷民の子孫達であり、

(ロ) 伊勢の地に、遠い以前から居住していたのも扶余系殷民の子孫達であったとすれば、(イ)(ロ)の二者間に、違和感など全く無かったであろう、と思われる。

大化　津島祭　愛知県西部
津島

2,651 P 10/18　戴冠式（たいかんしき）　朝廷の教　牛頭天王と蘇　130P

1868 69 70 71 72　大カン 1016 884 教 カン 憲コン

廃仏毀釈の大波

ところが、

明治五年（一八七二年）三月、明治政府は、祭政一致を基礎として、「三条の教憲」を発布した。

一、敬神愛国を旨と体すべき事。

一、天理人道を明らかにすべき事。

一、皇上を奉戴し、朝旨を遵守せしむべき事。

の三条である。

述べるまでもなく、てんのうとは名乗る牛頭天王の信仰が、第三条の「皇上を奉戴し、朝旨を遵守せしむべき事」に抵触するのは明白だった。

牛頭天王を排斥し、抹殺するにな、神仏分離令により、ただ単に、牛頭天王を仏教神と見做して排除するだけでは完全でなかった。

祇園天王社や津島天王社は、それぞれ八坂

京都の

愛知県西部の

コクヨ　ケ－20　20×20

岩手県東磐井郡蘇民祭 にっぽんの怪神 41頁

埼玉県大宮 氷川神社 素戔嗚命 吉田神道 ㊐2650P-1/6

2,651P-11/18

改めるのも「検める」 検査する。しらべる

改行

神社、津島神社と改称した。

・さらに、神宮寺を廃絶するか分離し、ご神体までも検めて、そこから仏教的なものを除くという手段がとられた。仏像・仏具・経文を破却し、焼却して、仏教色、仏教臭を一掃しようとしたのである。

・京都の祇園天王社が、地名の八坂を取って八坂神社と改称したのにともないで各地の祇園社もこれにならって八坂神社と改名した神社が目立った。（なお『祇園精舎』はインドの祇園に建てられた僧坊のことである。『広辞苑』）

・祭神をスサノヲノミコトとして素盞嗚神社、須佐之雄神社、須佐神社とした例は多く、〈素戔嗚命に因む〉八雲神社・須賀神社・津島神社・吉田神社・氷川神社とした例も多い。

・各地の祇園祭や天王祭は、一時的には衰退したが、〈〈〈〈〈〈〈〈〈現在は、旧に復するといっそう盛大で華やかになっている祭り。

〈京都八坂神社の祇園祭〉〈愛知県津島神社の天王祭〉〈岩手県水沢市黒石寺の蘇民祭〉などもある。（写真図版447〈京都八坂神社の祇園祭〉。他参照）

令和6年（2024）上、27㊐ 廃止された という。いずれの日にか、再開してほしい。

㊐2651-1/18 (巻) 427

コクヨ ケー20 20×20

・カラー
・頁全面に大きく載せて下さい。

2.651 P_12/18

428-1/5 (第7巻)

13QG 14QG 写真図版 447 京都(半字付)八坂(やさか)神社の祇園祭(ぎおんまつり)

『地図でめぐる神社とお寺』武光誠(たけみつまこと)、帝国書院、平成24年7月12日発行、4頁参照。

・【曳山】は、祭礼の山車のことである。長浜八幡宮の春祭や、唐津くんち（唐津神社の秋祭）のものなどが有名。（広辞苑）

・【飛騨高山祭】
岐阜県高山市で4月に行なわれる日枝神社の山王祭と、10月に行なわれる八幡神社の八幡祭で、豪華な屋台が練り歩く。（広辞苑）

・【神田祭】も、山車・踊などでにぎわい、よく知られている。

・【岸和田】の祭りは、荒っぽいことで名を高めている。

＝15日午前5時、吉本美奈子撮影

「追い山」全力

博多祇園山笠の最後を締めくくる「追い山」が15日早朝、福岡市博多区であった。七つの舁き山が約5キロのコースを疾走。明け方の街に「オイサ、オイサ」のかけ声が響いた。

新型コロナウイルス対策に関する制限のない山笠は4年ぶり。午前4時59分、今年の一番山笠・土居流が「ヤー！」と声をあげ櫛田神社の境内へ。見物客で埋まる桟敷席の前に山笠を据え「博多祝い唄」を唱和すると、拍手に送られながら重さ1トンもの山笠を舁いて街に繰り出した。その後も順々に他の流がスタートしていった。

朝日 令和5年（2023）7月15日（土） 夕刊 7面

みこしを担いでいる。（これが原形に近いのかも知れない）

山車の一種（福岡市、櫛田神社の祇園山笠が有名）

近いのかも知れない）

博多祇園山笠

・もともと、扶余系の民らの祭りだったのではなかろうか。

・日本列島の東西どちらでも、ほぼ同様の祭りが行なわれている。

（第7巻）428P－2/5

朝日 令和5 (2023) 10.8(日) 一面

ヨイヤー待ってた

国の重要無形民俗文化財「長崎くんち」の奉納踊（おどり）」が7日、長崎市の諏訪神社で始まった。新型コロナなどの影響で中止が続き、開催は4年ぶり。会場には多くの見物客が詰めかけた。

旧長崎市街の各町が、7年に一度の輪番制で、それぞれに伝わる自慢の演（だ）し物を披露する「奉納踊」。今年は六つの町が奉納した。船大工町の「川船（かわぶね）」が勢いよく回されると、見物客から「ヨイヤー」の歓声があがった。

（岡田真実、写真は吉本美奈子）

長崎くんち

（第7巻）428P-3/5

169

絢爛 勢ぞろい

絢爛豪華な祭り屋台で知られる「秋の高山祭」（八幡祭）が9、10の両日、岐阜県高山市であった。「曳き揃え」などの屋台行事は9日は雨天のため中止されたが、晴れ間がみえた10日午前、国重要有形民俗文化財の全11台が桜山八幡宮一帯に勢ぞろいした。

表参道では10台が美しさを競うように曳き揃えられ、境内では「布袋台」がからくりの妙技を披露した。10日も雨に見舞われ、午後の行事は中止された。

（荻野好弘、写真は溝脇正）

朝日/令和5年(2023)10月11日 朝刊 29面 八幡宮かぐら、かつお木が奉

・船上の応神天皇・市杵島姫命等々が示されているのだろうか。(?) (第7巻)169頁

・史実から離れ、次第に豪華さを増していったような印象を受ける。

(第7巻) 428P 4/5

朝日 平成6(2024)4.21(日)朝刊 25面

能登に元気 ちょんこ山

能登半島地震の被害を受けた石川県能登町宇出津で20日、例年行う「曳山祭」に代わって、「ちょんこ山祭」が催された。夏に開催される「能登あばれ祭」で知られる同地区。今年は地震で道路が損壊して曳山を引けないため、子ども用の小さい「ちょんこ山」2基が町を練り歩いた。子どもたちは木遣りを歌い、「チョーヤサー」「ハイハイト」とかけ声を響かせた。近くに住む小田す江さん(95)は「祭りはできん、と思っていた。今までとは違うけど、子どもたちの声が楽しそうで安心する」と話した。（金居達朗）

「ちょんこ山祭」では、例年使われる曳山（ひきやま）が展示された＝20日、石川県能登町宇出津、金居達朗撮影

朝日 令和6 2024 5.17 金 夕刊 6面

エーンヤー、エーンヤー。5月の大型連休に、石川県七尾市で力強いかけ声が響いた。「でか山」と呼ばれる高さ12メートル、重さ20トンもある山車を曳く、能登を代表する祭り「青柏祭」だ。

3町が1基ずつ、300人がかりで曳く。

祇園祭の山鉾にならって山車を奉納したのだそうだ。

国の重要無形民俗文化財に指定され、ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」に登録された全国33件の祭りの一つでもある。

朝日新聞 令和7(2025) 6.5 木 夕刊

(第7巻) 428 - 5/5

＊山車が3基、ハ ハ 状に並ぶと、壮観である。

77

朝日 令和6(2024)9.15(土) 朝刊 25面

秋に向かって走れ

勇壮さで知られる「岸和田だんじり祭」が14日、大阪府岸和田市内で始まった。

午前6時ごろ、始まりを告げる「曳き出し」があり、南海電鉄岸和田駅前にだんじりが次々と登場。その後、「ソーリャ、ソーリャ」と威勢のいいかけ声とともに、重さ約4トンのだんじり34台が街中を走り抜けた。交差点を豪快に曲がる「やりまわし」が決まると、見物客から歓声があがった。

五穀豊穣を祈る祭礼として300年以上続く伝統行事。15日はだんじりが三つの神社にお参りする「宮入り」がある。

（田中章博、写真は有元愛美子）

(第7巻) 429-1/2

S30(2018)7.3(火)～7.4(4回)

下

トル 2,651P－13/18

カンタ 976頁 持つ とある 賭博

・しかし「その意味や意義は「祭の華やかさ」と反比例するように忘れ去られていった感がある。

・現在の祇園祭・津島天王祭・黒石寺蘇民祭の本当の主人公は「牛頭天王」を「いったい誰が記憶しているだろうか」という。

「牛頭天王と蘇民将来伝説」川村湊「(株)作品社」二〇〇八年三月一五日第六刷発行「一三〇～四頁」「にっぽんの性神」九重京司「けいせい出版」昭和五十六年五月十日発行「四一頁」「裸体の肉弾相搏つ黒石寺の蘇民祭り」(本来「素っ裸の祭り」参照)

※「牛頭天王信仰・蘇民将来伝説」の行事の祭が「布片一つ着けない「素っ裸の祭」だったのか「」それとも、岩手県黒石寺の祭だけが形式を変えたのか「などという経緯については分からない。

コクヨ ケー20 20×20

(173)

もともと 2651P－14/18 (第7巻) 429－2/2

前頁末2行 岩手県黒石

大カンノ 1605　社前（しゃぜん）　大祓（おおはらえ）　こと

2,651P-18/18　19行

2,651P-14/18　こと

牛頭天王と 371P

蘇民将来札

■牛頭天王という実体的なものが消えてしまった後に、何が残ったのだろうか。

●牛頭天王という神名を祭神にしたり、神社名に用いるところは、ほとんどまったくといっていいほど無い。

●しかし、思いがけないところで、「蘇民将来」の札や護符を見かける場合がある。（第336図）

図〈蘇民将来札〉参照

●関東・北陸・東北地方において、蘇民将来のお札・お守り・注連飾り・茅の輪のお守りを授ける神社仏閣は、少なくない。それらのものが牛頭天王信仰や蘇民将来信仰に基づいていることは、もちろんいうまでもない。

■多くの神社で行なわれている「茅の輪神事」は、夏越大祓・夏越祭・大祓祭などと呼ばれている。門前や社前に大きな茅の輪を取り付けそのなかを潜る神事である。（既述）

コクヨ　ケ-20　20×20

こと

430

→ 2,651P-15/17

・頁の全面に載せて下さい。
・左頁に大きく掲載下さい。

2,651 P 15/18

431

1309　1429　第336図　蘇民将来札（松平斉光『祭』より）

『牛頭天王と蘇民将来伝説』川村湊、(株)作品社、2008年3月15日第6刷発行、374頁参照。

1309 ＊「蘇民将来之子孫」などと記した木簡は、これまでに全国で約60点ほど出土している。その多くは、中世から近世にかけてのものだ（「風土記の表現」上代文学会研究叢書、笠間書院、281～294頁参照〈増尾伸一郎氏執筆部分〉参照）。

＊陽物を変形させたようなものが見られる。

・カラー

・右頁全面に大きく掲載下さい。

← 口絵

12.5 QG 古い蘇民将来符（私蔵）

2,651 P 16/18

432

126 P →

← 127 P

12.5 QG 長野県上田市八日堂

12 QG ・大きい蘇民将来符は、30cmもある。

14 QG 写真図版448各地の蘇民将来

出来るだけ、左側へ寄せて下さい。

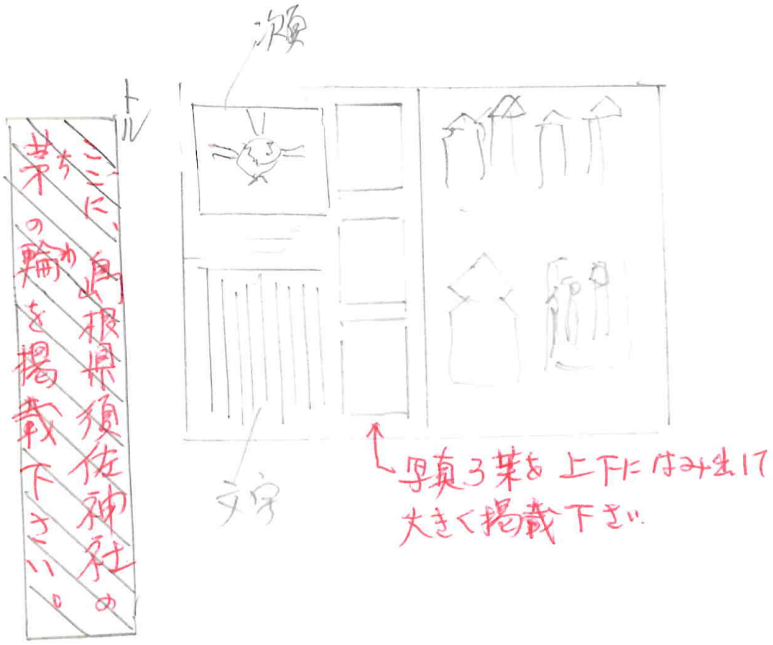
12.5 QG 埼玉県飯能市竹寺 壁掛

13 QG 『日本全国神話・伝説の旅』吉元昭治、勉誠出版、2009年1月20日発行、口絵、126~7頁

134頁、420頁、882頁参照

12 QG ＊上記の各地などには、扶会系般民の子孫蘇が住んでいたのではなかろうか。

・カラー
・左頁の右端に、三つの写真を縦に並べて掲載下さい。



12.5@G
茨城県稲敷市大杉神社

時間表
口絵
880~頁
882頁写真

433

420

2,657~ 17/18

134

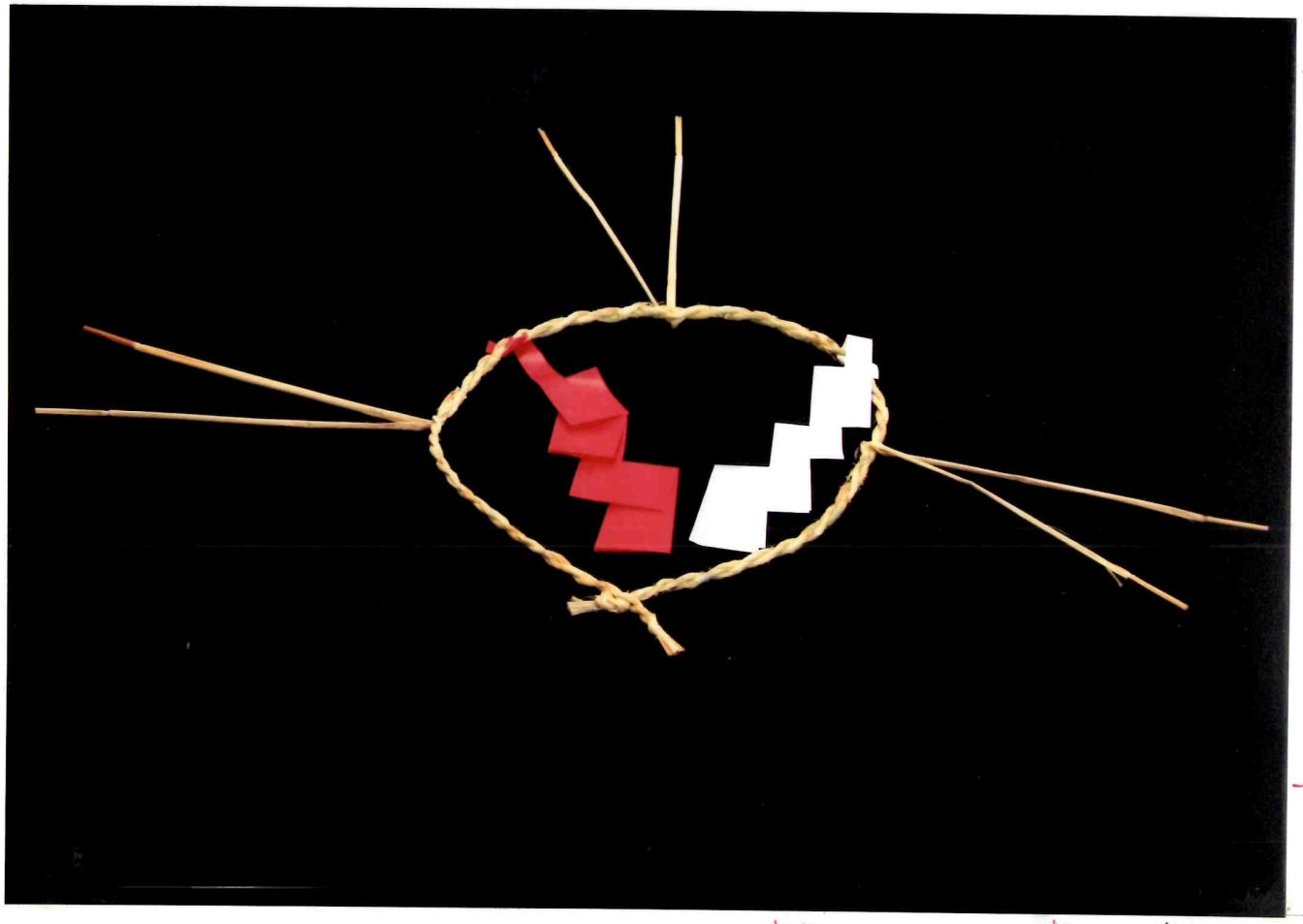
12.5@G
京都市八坂神社

12.5
@G
岩手県奥州市黒石寺（こくせきじ）

2.651P－18/18

・前頁のように、
左頁の左上に
配置して下さい

著作権許諾書の
入手不要



カット

カット

140G 写真図版449 島根県出雲市須佐神社の「茅の輪」

12 ・2月4日の立春に用いる。
0 ・平成27年2月4日入手。
G ・写真館にて撮影。

H31(2019)2.3 現在入手

任意入手
㊐2/25 2/8
〃 3/8

㊐ フォトースタジオ

・備後国（広島）の風土記については、後年の追加があるから、述べない方がよい

2,652ページ－1/6　大カワ 1517ページ 異説イ　茅纏の蘇 ㊥2650ページ－6/6 7行　殷 投げ与える　大モ粽 茅の葉で巻いたからいう　牛頭天王と 376ページ 1行

本体 ㊥2651ページ－1/1 12行

この神事も元来は、蘇民将来の説話に起源を持つ。

京都の祇園祭も、津島の天王祭も、もともとは夏祭だ。

（郭巨山のことか）

・祇園祭の郭公山（芦刈山）南観音山のように、山鉾の氏子たち独自で蘇民将来のお守りを出すところもある。

・粽（ルビ無し）に、「蘇民将来子孫也」の護符を付け、山鉾巡行の際、見物客に投げ授けるのである。

茅巻き。茅纏の消状のもの

こうした例から見ても、牛頭天王や蘇民将来が、完全に忘れられてしまったわけではない。

（第三十七章〈天鈿女命〉の項、『茅纏の消』参照）

（第7巻）435－1/2 郭巨山 八坂神社 128ページ　㊥2651ページ－1/1 13行　P2 八坂神社 あしかりやま　195ページ みなみかんのんやま

という。（「牛頭天王と蘇民将来伝説」消された異神たち、川村湊、㈱作品社、二〇〇八年三月一五日第六刷発行、三七～七頁参照）

＊

あえて言えば、「弥生時代中期末（後五〇年）頃、当初の弥生人達からの迫害を恐れ、関東・北陸・東北等へ、チリチリに逃げ散った扶余系殷民の子孫達が、昔なが

㊥2651ページ－14/18 12行

コクヨ ケ－20 20×20

新聞定価(税込み) 朝・夕刊発行地域のお客様 月ぎめ4,900円 1部売り 朝刊180円、夕刊70円

厄よけちまき担い手不足

京都祇園祭 機械化取り入れ伝統つなぐ

7月の京都・祇園祭で、疫神の侵入を防ぐお守りとして授与される「厄よけちまき」。八坂神社や各山鉾ごとに種類があり、伝統的に農家の女性らによって手作業で作られている。だが、高齢化などで担い手が減少。未経験の人や経験の浅い人でも作れるようにと、制作工程の一部を機械化する試みが始まっている。

厄よけちまきは疫病退散をはじめ、様々な御利益があり、山鉾ごとに異なる。京都では家の軒下に飾られ、疫神の侵入を防ぐ役割を果たしている。

近年、若い女性を中心に人気なのが「花盗人山」との別名を持つ「保昌山」のちまき。平安の女流歌人・和泉式部に恋い焦がれた平井保昌が、式部の求めに応じて内裏の紅梅を一枝手折って届けたところ式部と結ばれたと言われ、「恋愛成就」「縁結び」の御利益があるらしい。

ご神体が聖徳太子の「太子山」、菅原道真の「油天神山」は「学業成就」。神功皇后が身重の体で新羅へ出船し、勝利した後、無事に皇子を生んだという日本書紀の記述に由来する「船鉾」や「大船鉾」は「安産」の御利益があるとされる。

期間中に授与されるちまきの数は15万本とも20万本とも言われ、1本1500円前後するが、例年、あっという間に売り切れる。ちまき作りの担い手不足は山鉾町に共通する悩みで、授与する側ももっと作りたくても作れない現状があった。

そんな中で機械化を考えたのは、前祭の17日に巡行する山鉾のひとつ、放下鉾保存会の理事を務める印章店会長、松原常夫さん(73)だ。放下鉾では80歳を超えた京都市北区の女性が半世紀以上、1人でちまきを作ってきたが5年ほど前から「そろそろ引退させてほしい」と相談されてきた。

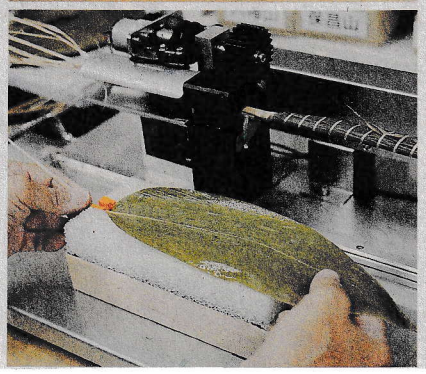
ちまき作りは手先の器用さや根気が求められる作業だ。稲わらを水でぬらしたササの葉で包み、イグサを等間隔でぐるぐる巻いて束にするが、しわが寄らないように巻き付けるには技術がいるという。京都市内にある自動縫製機の製造会社の協力を得たが、天然のイグサは太さや強度がバラバラで、機械で巻きつけるのが難しかった。そこで、高知と福井の和紙にミツマタを混ぜた特注の和紙を作り、イグサ色に染めて、イグサに代わる新たな「糸」を作った。半年余りの試行錯誤の末、専用の機械が完成した。

厄よけちまきは、熟練の人であれば1時間で8本ほど作れるが、機械化で4～5本は作れるようになった。今夏は、放下鉾で授与する4千本のちまきを作るほか、後祭で巡行する橋弁慶山のちまき作りも引き受けた。すでに他の保存会からも「うちのちまきも作ってもらえないか」と相談があり、来年以降、引き受けていく考えだ。松原さんは「これからも工夫を凝らして、疫病退散や様々な御利益を願う人々の思いにこたえていきたい」と話す。

(日比野容子)

長刀鉾や菊水鉾など3本のちまきをまとめて軒下に飾る家もある＝京都市中京区

一部工程を機械化して作った放下鉾の厄よけちまき



手前の台にササの葉を置き、機械でちまきを作る＝新井義顕撮影

H26(2014)11.25(日)

「牛頭天王信仰・蘇民将来信仰」を守り続けているのではなかろうかし

などと想像される。

なお、広島県芦品郡新市町（広島県東南端の福山市から西北約一五㌔）の伝承とされる（先述の備後国風土記逸文）には、武塔の神が、

「吾は速須佐雄の神なり。云々」

と言った、と記されている。

だから、「備後国風土記逸文」は、――――――

かなり後代に変容してしまった後の説話なの

だろう。

と思われる。

また、最も古い蘇民将来信仰は、長岡京跡から「蘇民将来之子孫者」という延暦十年（七九一）の木簡が出土している。

（「日本全国神社・伝説の旅」吉元昭治、勉誠出版、二〇〇九年一月二〇日発行、一二七頁参照）

そして多分、

弥生中期末（後五〇年）ころ、東北地方へ移り住んだ扶余系殷民の子孫達が、――――

早生化（早く結実することし）した「早稲」を栽培したのだろう。

と解される。（第二章「稲作の開始」の項冒頭参照）